

二〇一二年九月二四日

塩加減利く一口の栗ご飯
小鳥来てほぐるる野良疲れかな
雨後の珠抱きて燃ゆる曼珠沙華
白壁の土蔵に沿ひて秋桜
さながらにカノンの調べ法師蟬
力石否冬瓜の売れ残る
鰯雲余白の空の青きかな

二〇一二年九月二三日

茅葺の里にひろぐる蕎麦の花
蟪蛄の前脚パントマイムめく
松手入れ国旗掲げし迎賓館
稔田の海へなだるる平家村
驟雨きてより山里の秋は急
山影の伸びる棚田の彼岸花
赤とんぼ古墳へ夕日撒き散らす
休耕田いまこすもすの花盛り
我が影のつきて離れぬ月の道
寝ね難き秋の夜刻む古時計

二〇一二年九月二二日

落暉いま刹那と思ふ秋の海
句碑に降る木の実ならばと拾ひもす
風紋の砂丘果てなし鰯雲
漁火の等間隔や沖の秋

こすもす

花茗荷

よし女

有香

せいじ

うつぎ

三刀

花茗荷

宏虎

満天

うつぎ

はく子

雅流

菜々

こすもす

宏虎

あさこ

わかば

有香

花茗荷

こすもす

道づれの媼は多弁秋彼岸

広き野を突つ切る秋の燕かな

七輪に備長炭や秋刀魚焼く

鈴なりの実に枝撓む大銀杏

二〇一二年九月二二日

萩の径と見かう見して踏み惑ふ
満天の星に濡れもす台風過
鰯雲沖の巨艦の動かざる

二〇一二年九月二〇日

秋霖が玻璃にとびつく美術館
迷ひたる道も一会や秋日和
濁り池灰と映りし初もみぢ
寺までの小道を埋む曼珠沙華
ちよとお茶のつもりが秋の暮早し
サイクリングなまくら坂に秋暑し
二〇一二年九月一九日
ささやかな風にも吹かれ秋の蝶
鼻欠けし地蔵の顔に里時雨
二〇一二年九月一八日

きづな

はく子

あさこ

ぽんこ

わかば

なつき

宏虎

満天

花茗荷

ぽんこ

よし女

有香

なつき

なつき

有香

有香

百合

有香

よし子

毎日句会みのる選・二〇一二年九月二六日